【数字符の基本】
（邪鬼流の考え方）

[01]　「ア」＝「ひとつ」［１］
・a boy.　・a book.　・a box.
［ａ（ア)］は「１個」を表す「冠詞」。
「ア」と聞いて思い浮かぶ数は「１」・・・［ア＝１］を採用。

[02]　「イ」＝「１」に限定
「イチ」⇒　「イ」＝［１］を採用。

「五六七八」を「イ・ム・ナ・ヤ」と読むという和風の読みから、
［イ＝５］　とするのは捨て難いが、邪鬼流では不採用。
「イ」を「１」としたり「５」としたりすることでの混乱を避けるため。

[03]　「ウ」＝「５」　　麻雀語
麻雀語（中国語）では「５」＝「ウー」
「五六七八」が「ウー・リュー・チー・パー」だから、［ウ＝５］。

[04]　「エ、オ」＝「０」
「エ」⇒「円」⇒「〇」　という連想で、［エ＝０］。
「オ」⇒「オー」⇒「Ｏ」　という連想で、［オ＝０］。

[05]　「カ、ケ、コ」＝「５」
「コ」は「５（ゴ)」と容易に結びつく。［コ＝５］。

更に「カ」「ケ」との結びつきを考える。
数詞に　１個、２個　があり、１箇　２箇　とか、１ヶ　２ヶ　と書く。
文書の箇条書きは「カジョウ」で、「個・箇・ケ・カ」はすべて「コ」の仲間。
他の数字を連想することがなく、［カ・ケ・コ＝５］と括るのがベター。

濁音［ガ・ゲ・ゴ＝５］とするのも特に問題はない。

[06]　「キ、ク」＝「９」
「九」は「キュウ、ク」と読むことから、　［キ・ク＝９］。
濁音を含め［ギ・グ＝９］とする。

[07]　「サ」「タ」「ソ」＝「３」
「サ・ザ＝３」　当り前。

「サンキュー」を「タンキュー」と発音したり、
［ｔｈ］が［ｔ］になまることが多い。
そこで「タ」は「サ」と同類の数字符（音）と考え、「タ・ダ＝３」を採用。

大阪に「十三」（ジューソー）という地名があり、
「省三」（ショーゾー）とか「信三」（シンゾー）という名前もよくある。
これを例に「ソ・ゾ＝３」　を採用。

[08]　「シ・ス」＝「４」
「４」は「シ」で、また麻雀語の「スー」だから、「シ・ス＝４」。

濁ったときは「ジ・ズ＝２」とする。
「二郎・二男」（ジロー・ジナン）を基に考えるのが無難。

[09]　「セ」「テ」＝「７」
「セブン」の「セ」から、濁りも含めて「セ・ゼ＝７」。

「ｔｈ」＝「ｔ」のなまり、「劇場＝テアトル」などから「セ」⇒「テ」と考え、
「テ・デ＝７」も採用。

「テ・テン＝１０」とする異論もあるが、邪鬼流では混同防止のため不採用。

[10]　「チ」＝「７」、「ツ」＝「２」
「７」は麻雀語の「チー」、「２」は英語の「ツー」。

濁る場合は「ヂ＝ジ」「ヅ＝ズ」となり、同類一括にする。
つまり「ヂ・ヅ＝２」とする。

[11]　「ト」＝「１０」
「ト」を数字符とするために、「１０」を採用。２数字を１音で読む特例。
濁りを含め「ト・ド＝１０」。

ただし、［１０の位］を「ト」とするのは避ける。
「トンビ」＝「１１」（１０１）、
「豆腐」＝「１２」（１０２）、
「父さん」＝「１３」（１０３）、
「同心」＝「１４」（１０４）など、
・・・いずれも（　）内を正とする。

また「１０」＝「テン・テ」は不採用とし、邪鬼流では「テ・デ＝７」で統一。

更に、三十一（ミソヒト）文字、三十日（ミソカ）のように、
「１０」＝「ソ」も有力だが不採用とし、邪鬼流では「ソ・ゾ＝３」で統一。

[12]　「ナ」＝「７」
あったりまえで「ナ＝７」。

[13]　「ニ・ヌ・ネ」＝「２」
「２」は「ニ」で文句なし。あとは強引なこじつけで・・・。
「ヌ・ネ」をどうしても数字符にしたくて、
「ニゥ　⇒　ヌ」、「ニェ　⇒　ネ」と、思いっきりなまり、
「ニ・ヌ・ネ＝２」を採用。
強引だが、他の数字と混同することがなければ、ＯＫ　か。

[14]　「ノ」＝「０」
「０」は何にもないから「ノー」（ｎｏ）。印象的に「ノ＝０」。

[15]　「ハ・ヘ」＝「８」
「ハ」と一緒に「ヘ」も「８」に入れる。
「ハーイ」も「ヘェ」も、同じ返事の仲間。。

濁音・半濁音を含め「ハ・バ・パ・ヘ・ベ・ペ＝８」。

[16]　「ヒ」＝「１」
「１・２・３」「ヒ・フ・ミ」の「ヒ」。
濁音・半濁音を含め「ヒ・ビ・ピ＝１」。

[17]　「フ」＝「２」
「ヒ・フ・ミ」の「フ」。
濁音・半濁音を含め「フ・ブ・プ＝２」。

[18]　「ホ」＝「４」
英語読みの「フォー」から「ホ」をあてる。
濁音・半濁音を含め、「ホ・ボ・ポ＝４」。

[19]　「マ」＝「０」
「０」は丸いから「マル　→　マ」。

[20]　「ミ」＝「３」
「ヒ・フ・ミ」の「ミ」。

[21]　「ム・メ・モ」＝「６」
「６」は「ムッツ」の「ム」。

「メ」「モ」は、数字符として認知するための苦肉の策・・・。
「ムェ⇒　メ」「ムォ　⇒　モ」となまり、他に類似音の数字がないので採用。
「ム・メ・モ＝６」。

[22]　「ヤ」＝「８」
「８」は「ヤッツ」の「ヤ」。

[23]　「ユ」＝「７」・・・認めて、ネ
「五十音」のすべてに「数字符」としての理論付けをし、
最後まで残ったのが「ユ」。
しかも「【ユ】にあてる数字」を求める方が非常に多い。

ある日、ふとユメ・マボロシと浮かんだのが、「７」に「アンダーライン」。
［　7　］［　7　］・・・これって、立派に「ユ」に見える。

大喜びで「ユ＝７」　に決定。「残り物に福」だ。
最後まで残った「ユ」に「ラッキー・セブン」が待っていたのだ。

「湯川秀樹」さん、「三島由紀夫」さん、「優香」さん、「真由」さん、
「裕次郎」さん、「あゆ」さん、「日本郵便」さん、お待たせしました。
「ユ」は「アンダーライン」で強調した「ラッキー・セブン」です。

[24]　「ヨ」＝「４」
「４」は「ヨッツ」の「ヨ」。

[25]　「ラ・リ・ル」＝「６」
麻雀語の「リュー」を原点に「リュー」→「リ」、同じく「リュー」→「ル」。
次に「ル」をなまって「ルァ」→「ラ」

強引だが、「ラ・リ・ル＝６」は、他に類似音の数字がないので、採用。

[26]　「レ」＝「０」
「ゼロ」が幅を利かして忘れがちなのが、日本語の「零（レイ）」。
「レ＝０」を採用。

[27]　「ロ」＝「６」
「６」は「ロク」だから「ロ」。

[28]　「ワ」＝「０」
「０」は丸い「輪っぱ」だから「ワ」。

[29]　「ヲ」＝「０」
現代仮名遣いでの「ヲ」は「テニヲハ」（助詞）だけで使い、発音は「オ」。
「ヲ」＝「オ」＝「０」　と考えて問題はない。「ヲ＝０」とする。

ここまで来て、ちょっとした発見。
「助詞」の邪鬼流表記は「ハ⇒ワ」「ヘ⇒エ」「ヲ⇒オ」で、
この数字符はすべて「０」になる。これは愉快。